



芝蘭会報

第220号

発行所

一般社団法人 芝蘭会
京都大学医学部同窓会

〒606-8315

京都市左京区吉田近衛町

TEL 075-751-2713

FAX 075-752-4015

E-mail: info@shirankai.or.jp

http://www.shirankai.or.jp

主な内容

- ② 坂口志文教授「ノーベル賞受賞」
第80回京都大学原爆災害総合研究調査班
遭難者の慰霊
- ③ 校友会・KMSIFUNDより
新任あいさつ・特別寄稿
- ④ 「海外研修プログラム」経路談
京大関係院長協議会定例総会
- ⑤ 支部だより「大阪」「三重」「岐阜」
人事異動・会員計報

近年の医学教育における 変化と今後の展望



京都大学大学院医学研究科
医学教育・国際化推進センター教授
片岡 仁美



部基礎臨床合同教育委員会(当時)でとりまとめられ、(中略)これが後にLS(レベル・システム)論と呼ばれるようになった教育理論の最初の形である。といった記載に、本学の現カリキュラムの源流をみるることができます。

今後の課題と方向性

次に、現在取り組んでいる様々な医学教育に関する新たなプロジェクトについて述べます。法的にも整備が進んだ診療参加型臨床実習の推進は国としても力を入れており、本学は2024年度文部科学省の高度医療人材養成拠点形成事業タイプAに採択され(選定大学は全10大学)、診療参加型臨床実習の一層の実践とAIを活用した臨床研究の推進を両輪として進めるプロジェクト(KyotoNext)を展開しています。特に臨床教育においては、人的・時間的リソースが限られている中で、「いかによき教育を行うか」という命題に「次世代型屋根式教育」を掲げて取り組んでいます。臨床実習アイトラッキングシステム(TA)制度(臨床系大学院生を対象としたオンライン学習による教育スキル向上とTAとしての現場教育参画を推進するプログラム)を筆頭に、学生や研修医も「教える教えられるサイクル」に主体的に取り組む学びのサイクルを形成したいと考えています。臨床実習の担当教員が診療科を超えて連携できる臨床教育小委員会も発足しました。本学の臨床実習では学外施設からも多くの指導をいただいております。層の連携を深めてゆきたいです。

「レベル・システム方式」という単語は、本学医学部カリキュラムの特徴として受験サイにも記載されていますが、一般的な医学教育用語集などには見当たりません。このため、品川先生の論文でカリキュラム開発の軌跡と独自性を知り得たことは心躍るものがあります。従来「Ones」の縦割り教育の限界を超えるために、当時新たな概念であった「Ones」論、Shibata論を取り入れた背景についての深い考察にも感銘を受けました。特に、「カリキュラム改訂作業の始まった当初から、医学教育論の研究が平行して進められ、現在も教育体制委員会などを中心に研究会が開かれてつねに理論的裏づけが求められている点に特色があるといえるかもしれない」という一文には深く共感しました。

このように、本学の教育カリキュラムは1970年に独自に基盤を確立して以降、改定を重ねて現在に至ります。それは、独自性と自由の精神を重視し、新しいものと伝統の両者を大切にす

プログラムの意欲的な構築と従来プログラムの刷新に加えて、米
国臨床留学プログラムも実現しました。また、勉強会や海外の講師による症例検討会は研修医のみならず多くの学生が参加し、まさに「共に学びあう環境」が整いつつあります。そのような取り組みが功を奏し、2025年の当院プログラム受験者数は過去最大となり、医師臨床研修マッチングでは国立大学唯一のマッチング率100%となりました。

2025年6月に開催された「特定機能病院及び地域医療支援病院のあり方に関する検討会」では、19の基本領域すべての対応を新たに求める(病理、臨床検査、総合診療への対応を追加することが概ね了承されました。大学病院にも一層の地域医療への貢献、総合的能力を有する医師の育成が期待されることになり、こうした要請にも学生教育・卒業教育を二連のものと考えて取り組む必要があります。

在となるべく努力しています。2025年末に行われた「KURUME」では、学部教育から大学院教育まで多岐にわたるテーマについて、白熱した議論が交わされました。互いを尊重しつつも自由な議論を深める過程こそを重視する本学医学部の姿勢は、このような場にも象徴的に現れており、独自性と挑戦の原動力になっていると感じます。

125年の歴史と先人の業績はもとより、素晴らしい学生たちの個性の輝きが我が国のみならず世界の医学の発展につながっていることを日々感じられるこの環境をありがたく思いつつ、急速に変化する時代を牽引する革新的な教育を目指し、微力ながら尽力させていただきます。今後ともなお一層のご指導を賜りますよう、よろしくお願いたします。

令和7年度
秋の叙勲

◆瑞宝重光章
福永 仁夫 (昭和45年卒)
元川崎医科大学長

◆瑞宝双光章
笹野 満 (昭和46年卒)
元丹後中央病院長

「近年の医学教育における変化」
2023年に施行された医師法の改正は重要な点でしょう。第17条「医師でなければ、医業をなしてはならない」に第17条の2として次の一文が追加されました。「大学において医学を専攻する学生であつて、当該学生が臨床実習を開始する前に習得すべき知識及び技能を有しているかどうかを評価するために大学が共用する試験として厚生労働省令で定めるものに合格したものは、前条の規定にかかわらず、当該大学が行う臨床実習において、医師の指導監督の下に、医師として具有すべき知識及び技能の習得のために医業をすることができ。」

2001年に医学教育モデル・コア・カリキュラムが提示され、2005年頃から医学生を対象とした共用試験(CBT・OSCE)が実施されるようになり、2017年には、一般社団法人日本医学教育評価機構(JACME)による医学教育分野別評価が始まり、国際標準に基づく医学教育という観点や診療参加型臨床実習の充実が強調されるようになり、さらに、2018年には、前川レポートから27年ぶりに医学生が実施可能な医行為の範囲が改定されました(門田レポート*)。2022年には医学教育モデル・コア・カリキュラムの改訂版が公表され、2023年に共用試験の公的化と改正医師法の施行に至りました。

このように、医学教育を取り巻く大きな変化は2000年代以降を中心に起こり、学生の医行為の範囲が明確化され、法的な裏付けも得られた一方で、共用試験の公的化による教育現場の負担は増大しています。また、2024年4月からの医師の働き方改革による時間外労働時間の上限規制は、教育環境にも影響をもたらしています。

京都大学医学部の
教育カリキュラムの独自性
本学医学部は2024年にJACMEによる医学教育分野別認証評価を受審し、高い評価で認証を更新しました。特に、卓越した研究者を育成するためのMD研究者育成プログラムやマイコースプログラムなどの先進的な取り組み、学生が医学教育の改善に自主的に参加していること、教授全員が参加する医学教育ワークショップ(KUROME)や臨床教授等との協議会が毎年開催されている

ことに大変高い評価を得ました。2017年の初回認証時から、医学教育・国際化推進センターが全体のコーディネーターを行う体制が形成されており、今回も受審の準備として過去資料を多く参照しました。その中から、本学の特徴的なカリキュラムである「レベル・システム方式」について、1976年の医学教育誌に掲載された当時本学医学部生理生化学教室の助教であった品川嘉也先生の論文を紹介したいと思います。

「1969年頃からカリキュラム研究が教官の間で盛んになり、ウエスタン・リザーブ大学の臓器別カリキュラムについて輪読会や研究会が持たれたのが、本学における医学教育カリキュラム研究の出発点となった。」、「このカリキュラム研究は次第に教育理論の研究にも進んでゆき、研究結果は京都大学医学

育カリキュラムは常に見直され変化し続けていくべきなものでありますが、これまで守ってきた先人の精神を大切に、新しい時代に生きる学生の学びを最大化させるようなカリキュラムを目指す必要があります。昨今はAIが教育現場に及ぼす影響も甚大であり、我々は常に理想を求めつつ、急速に変化する現実への対応も迫られている状況です。

卒業教育を二連のものと考えて取り組む必要があります。さらに、2023年度から始動した「KUSNOKIプロジェクト」も医学研究科と大病院が連携した取り組みです。厚生労働省の子育て世帯の医療職支援事業に3年連続採択いただき事業を進めておりますが、本事業では職種を越えて、医療職・医学研究者の働く環境の整備とキャリア支援に取り組んでおり、様々な教育改革を後押しする存

参考文献

- *1 <https://www.mhlw.go.jp/content/10803000/000341168.pdf>
- *2 https://www.mext.go.jp/content/20240220_mxt_igaku-000028108_01.pdf
- *3 品川嘉也. 京大医学部における医学教育理論研究の現状. 医学教育 第7巻・第2号, 86-89, 1976
- *4 <https://kyoto-next.med.kyoto-u.ac.jp/>
- *5 和足孝之. 京都大学医学部附属病院における臨床研修改革への挑戦. 芝蘭会報 No.218号, 2025

大阪大学 坂口志文 特別荣誉教授 ノーベル生理学・医学賞受賞 免疫学の新時代を切り拓く発見



会見する坂口志文特別荣誉教授 (写真提供:大阪大学)

「Treg」の存在を世界で初めて明らかにし、その分子機構を解明しました。この発見は、自己免疫疾患やアレルギーの病態理解に大きな進展をもたらしただけでなく、免疫応答のバランスを制御するという新しい治療概念を確立しました。さらに、「Treg」を標的とした治療戦略は、自己免疫疾患の治療、がん免疫療法さらに臓器移植時の拒絶反応の制御において世界的に応用が進められています。

10月6日発表当日、大阪大学吹田キャンパスのコンベンションセンターで受賞記者会見が行われました。今回の受賞は大阪大学、ひいては日本の免疫学研究の歴史に新たなページを刻むものであり、生命科学の研究を志す者にとって大いに励みとなるものです。

坂口教授の研究は、基礎免疫学から臨床応用まで幅広い領域に影響を与えています。今後、免疫制御のメカニズムを活用した新しい治療法の開発が加速することが期待されます。

坂口志文教授 受賞コメント

このたび、ノーベル生理学・医学賞という栄誉ある賞をいただき、大変光栄に思います。これまでともに研究を進めてきた多くの仲間、学生、共同研究者の皆さま、そして研究の機会と環境を与えてくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。

私たちが発見した「制御性T細胞 (regulatory T cell)」は、免疫応答を抑制し、過剰な炎症や自己免疫反応を防ぐ重要な細胞です。長い年月をかけてこの細胞の存在と働きを明らかにすることができたのは、多くの研究者の情熱と協力、そして基礎研究の重要性を支えてくださった社会の理解のおかげです。

この研究は、免疫系が「攻撃」と「抑制」という二つの力の絶妙なバランスの上に成り立っていることを示し、人間の体に本来備わる「寛容」のメカニズムを解き明かすものでした。この成果が、自己免疫疾患やアレルギー、がんなどの新しい治療法につながることを心から願っています。

研究は一人ではできません。ともに考え、悩み、喜んできた仲間たちの存在が、この成果を導いてくれました。

今後も若い研究者が自由な発想で基礎研究に挑戦できる環境づくりに力を尽くしたいと思います。そして、生命の不思議を探究することの喜びを、次の世代へとつなげていきたいと願っています。

第80回 京都大学原爆災害 総合研究調査班 遭難者の慰霊



感謝状の贈呈



献花の様子



米山広場での献花・追悼の様子

1945(昭和20)年、原子爆弾が投下された広島で被爆者調査、診療にあたった「京都大学原爆災害総合研究調査班」は、同年9月17日に西日本を襲った枕崎台風による土石流の被害にあいました。その犠牲となった方々を慰霊する集いを、2025年9月13日に広島県廿日市市の「市民活動センター」および「廿日市市宮浜温泉(旧大野町)米山広場」の慰霊記念碑前に行いました。

調査班は、原爆投下直後に軍の依頼を受けて医学部と理学部を中心とした教員、学生、看護婦等で結成され、9月3日からは大野村(現廿日市市)にある大野陸軍病院を拠点に原子病患者の治療および病理学的研究調査が約50名の調査班員により進められました。折しも「枕崎台風」と呼ばれる大型台風による大規模な土石流で班員11名を含む156名が犠牲となりました。慰霊は、例年被害があった9月17日の直近の土曜日に自由参拝により行われ、また5年ごとに式典を開催していましたが、2020年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を考慮し、やむを得ず式典開催を見送ったこともあり、

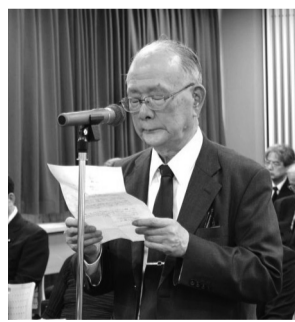
「市民活動センター」での式典後、慰霊記念碑のある「廿日市市宮浜温泉米山広場」に移動し、慰霊記念碑前において犠牲者への献花と追悼の祈りを捧げました。式典の終了後には、近隣のホテルにて本学関係者、廿日市市関係者および遺族らによる懇談会が行われました。また、翌9月14日に開催された廿日市市主催(京都大学共催)による「廿日市市戦後80年非核平和事業 柳田邦男記念講演・朗読・シンポジウム「枕崎台風による大野陸軍病院の惨禍の伝承」」では、ノンフィクション作家・柳田邦男氏の講演に続き、久保達彦医学研究科教授による「大野陸軍病院の惨禍に学ぶ複合災害への対応」と題する講演も行われました。



伊佐 医学研究科長



湊 総長



梶川 幹事



佐々 理学研究科長



遺族代表の 大井 氏



松本 市長



黙祷の様子

京都大学医学部 校友会・教育研究支援基金 (KMS-FUND) だより

〒606-8501
京都市左京区吉田近衛町
京都大学医学研究科事務部
TEL 075-761-2467
FAX 075-752-1528
Mail-Address:
kyoto-kms-fund@office.
med.kyoto-u.ac.jp

第10回京都大学医学部校友会 キャンパスツアー報告

校友会 親睦委員会
吉村弘子

2025年5月24日
(土)、全国から一回生の保護者・家族61名が参加し、第10回キャンパスツアー(京都大学医学部校友会主催)が開催されました。今回は、諸事情により午前中のみ開催でしたが、医学研究科事務部のご支援のもと校友会役員・親睦委員が案内し、親しみと学びのあるひとときを共有しました。また、がん免疫総合研究センター(CCI)、Bristol Myers Squibb棟)の見学が実現したことも、大きな反響を呼ぶものとなりました。



そして、京大名誉教授 本庶佑先生のノーベル生理学・医学賞受賞記念メニューメントを拝見しつつ、今回初めて見学プログラムに加わったCCIのBristol Myers Squibb棟に足を進めました。2024年秋に竣工したこの新棟は、建築家・安藤忠雄氏による設計協力のもとで完成しており、最先端の研究環境が整えられています。同棟1階のニトリホールでは、CCIセンター長の本庶先生をはじめとする研究者の方々の活動紹介動画を鑑賞し、最新の研究と、その研究環境に触れる貴重な機会となりました。

最後に見学したのは、同建物内にある本庶先生のがん免疫研究に関する展示室です。カラフルで創造性にあふれる展示空間に、本庶先生の業績が余すことなく紹介されており、参加者は思わず時間を忘れて見入っていました。「科学がこんなにも魅力的に語られているとは」と驚きの声も上がりました。

興奮冷めやらぬ中、CCIの正面玄関前で最後の記念撮影を行い、校友会の千田美保子副会長の挨拶をもってツアーは無事に締めくくられました。

本ツアーの実施にあたり、ご講演いただいた小泉昭夫先生、多大なるご協力をいただいたCCI、芝蘭会事務局、医学研究科事務部の皆様にご心より感謝申し上げます。また、ご参加くださった保護者の皆様にも、深く御礼申し上げます。

今後とも、校友会活動へのご理解とご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

当日は、初夏とは思えぬ小雨と肌寒さの中、芝蘭会館での受付後、医学部構内の施設や建物を見学しながら、最初のプログラムの会場である基礎医学記念講堂に移動しました。

基礎医学記念講堂は、1902年に建設された旧解剖学講堂を改修した建物です。荘厳な階段教室にて、校友会の藤原真治会長による開会挨拶に続き、京大名誉教授 小泉昭夫先生(京都保健会 社会健康医学福祉研究所 所長)に「京大医学部の歴史の断片」と題して講演いただきました。明治から現代に至る医学部の歩み、戦前・戦後の

医療制度と教育の変遷など、豊富な資料とともに語られる内容に、参加者一同は深く関心を寄せていました。講演後には、小泉先生を囲み記念撮影も行いました。静かな講堂に笑顔が広がり、共に時間を過ごす中で自然と温かな空気が生まれていました。

続いて、同館内の医学部資料館を見学しました。解体新書や野口英世博士の博士論文をはじめとする貴重な医学資料が展示されており、京大医学部の重厚な歴史に触れる時間となりました。「伝統を感じた」との声が数多く聞かれました。



KMS-FUND 申込書 (表・裏)

**第19回
京都大学医学部校友会
総会・講演会のお知らせ**

日時 令和8年 秋頃
場所 芝蘭会館本館 稲盛ホール
特別講演会
講演会終了後、懇親会パーティー

令和6年度 卒業生代表あいさつ 6年間の「自由」が問うたのは、 ゆるぎない価値の体系

生地 耕



本日は、私たち卒業生を送るためにこのような温かな式典を催していただき、誠にありがとうございます。祝賀会を主催いただいた校友会の皆様、卒業生一同心より御礼申し上げます。また、ご来賓の方々をはじめ、教職員の先生方、そして保護者の皆様には、お忙しい中ご臨席を賜りまして、ありがとうございます。

またなつては、なんとも滑稽な苦い記憶ですが、私は入試の面接で京都大学の印象を問われ、「自由を試してやりたいです。」と申しました。校風に謳われる自由が学問にとって果たして良いものなのか疑いを持つていた私は「それをこれからの6年間で判断したいです。」と、おそらく、してやったりの表情で申しました。

いま私たちの胸中を顧みて、ここでの学びを通して慣れ親しんだ、二つの単純な価値の体系をたしかに発見いたします。その一つは、「利他、人助け」に価値をおくというものです。それは、健康が人々の幸福にとってきわめて重要だという明らか前提のもと、医療・医学が直接・間接に人々の幸福に貢献することを目的とし、また実際にそれを実現することができるといふ、実践的な信念に支えられています。もう一つは、「真理、真実」に価値をおくことです。それは、そもそも真理というものが存在し、なおかつ科学という一定の手続きによって、正しくそれを見出すことができるという信念に支えられています。

壇上から皆様を拝見しますと、やはり、今日と同じく晴れ姿でホールに集った6年前の入学式のこと、懐かしく思い出されます。それぞれの記憶をいまに重ね、私たちの裡にいつたいたような変化を見出すことができるでしょうか。

それが滑稽といえますのは、おわかりのとおり、私が自由についていくつかの重大な思い違いをしていたからです。もっとも大きな誤解は、もちろん、私が自由にとつての試練であったのではなく、自由が私たちにとつての試練であったということです。ここにいる卒業生のおそらく全員が、経験を通じてこれをよくご存じのことと思います。そして、その試練には、それぞれの勝利とそれぞれの敗北があることと推察します。私自身は試練に勝ったとはいえない、というより大きく負け越して、ある意味で自由の偉大さを感じました。

先生方、諸先輩方の教えと実践に接して学んだこれらの体系は、言葉にするほどでもなく単純で、そしておそらくナイーブにすぎないものかもしれません。だからこそ、強く、安定し、信じるに足る体系であると思います。私自身、どう生きていくべきかというきわめて大膽な問いに直面したとき、これらの体系を自らのうちに発見したことは僥倖でありました。

そしていま、時代の波は、そのような確かな価値の体系を自覚的に持つことを私たち全員に要請するものとして迫っているように思われてなりません。コモンセンス、良識という言葉すらその意味を転覆せられ、弱きものための倫理が揺らいでいます。そしてまた、弱きものためにある医学・医療に携わって生きてゆく限り、私たちもその状況から逃れることはできません。



私自身、追想されますのは、あのときのびかびかのスーツ、びかびかの好奇心、そしてびかびかの傲慢心でございます。い

自由について何ごとかを答えるならば、決してそれは無意義なものではなかったと断言できます。6年間は、たしかに自由で、長く、穏やかな時間でした。そして、そのような時間に身を浸すことで、個別的な知識を超えた、自らの支柱となるような肝心なものを学びとることができたと思っております。



新任あいさつ

未知に溢れた ヒトゲノム情報から 未来の革新的医療へ



京都大学大学院医学研究科
医学専攻基礎病態学講座
病態生物医学分野 教授
村川泰裕

2025年8月16日付で、京都大学大学院医学研究科病態生物医学分野(病理学第一講座)の教授を拝命しました村川泰裕でございます。着任にあたりご挨拶申し上げます。

2002年に京大医学部に入学し、医学部生の頃は放射線遺伝学教室にとつぱりと入り浸って研究をさせていただきました。分子生物学や遺伝学の基本的な手技を学び、そして、研究者という「変人」の生き方に感銘を受けた時期でした。京大の自由な学風のもと、好奇心や感動というものが、全ての原動力であると教わりました。

2008年に大学を卒業後、京大医学部附属病院で臨床経験を積ませていただきました。血液・腫瘍内科および病理診断科・病理部をはじめとする様々な診療科で、病気の複雑さ、医療の可能性と限界、そして患者さんの苦しみについて深く学ばせていただきました。

ちょうどその頃、次世代シークエンサーが世に登場し、その大きな可能性に興奮を覚え、遺伝子の配列情報や発現パターンを網羅的に解析するとい



う、かつては不可能であったことが、突如として現実になった時代でした。そこで私は、ドイツ・ベルリンにあるマックス・デルブリュック分子医学研究所に留学し、ゲノム解析の研究に取り組みました。2014年には、ベルリン自由大学で博士号を取得し、その後、2016年に横浜の理化学研究所において、ラボPIとして研究室を立ち上げる機会に恵まれました。京大医学研究科の血液・腫瘍内科や腎臓内科からも大学院生がラボに加わってくださり、遺伝子の発現を制御するエンハンサーと呼ばれるゲノム配列の解析に取り組みしました。2020年からは、京大高等研究院ヒト生物学高等研究拠点(ASHBI)の教授に就任し、ヒトの病気の遺伝的背景な

どヒト生物学の研究を推進してまいりました。2025年からは医学研究科・医学部に加わり、医学部の先生方や若い学生の皆さんと交流を深めていけることを、心より嬉しく存じます。「ヒトゲノムに一体何が書かれているのか。」については驚くほど解明されています。この未知に溢れた生命の基本設計図を解き明かすことで、病気の発症機序を明らかにし、新しい薬・医療・ヘルスケアを創っていきたくと考えております。本教室では、第一に、オリジナルで破壊的なゲノム解析技術を生み出したいと思っております。ゲノム分野のこれまでの軌跡を振り返ってみても、絶えず新しい手法論が求められてきました。次世代シーケンシング技術、シングルセル解析技術、ゲノム編集技術に代表されるように、こうした革新的な技術はサイエンスの在り方を一気に変革するのみならず、社会全体に大きな影響を与えます。

第二に、2050年の「未来の世界」を見据えて、長期的な視点から真に科学的・医学的に価値があることを考え抜きたいと思っています。常識を覆すような新しい医療資源を見出し、病に苦しむ患者さんを減らしたいと夢見ています。サイエンスには世界を変える力があるという信念をもって、粘り強く邁進していきます。

芝蘭会会員の先生方には、今後ともより一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

特別寄稿

つるべさん

内藤 豪剛

笑福亭鶴瓶の咄ではありません。今年令和7年(2025年)再開された祇園祭の武者行列の事をお話しします。

祇園祭というとおほかたは山鉦巡行を思い浮かべられ、中には巡行がお祭りの主役と思われる方もあります。祭りの月、7月初め朔日から締め31日まで、神社、氏子、様々な支援の人々によって催行されます。祇園祭の中心は17日の神幸祭と24日の還幸祭の神輿渡御にあります。素戔嗚尊、櫛名田姫、御子神の神霊(御魂)を三基の神輿に移し、氏子町内を巡り、四条寺町東の御旅所に、還幸祭までの一週間鎮座されます。この神幸の先導を務めるのが「つるべさん」です。

◆「つるべさん」の由来
京都市東山区六波羅地区に弓矢町という町があります。通り名でいうと松原通大和路東入ル辺り。少し東へ行くと六波羅蜜寺、六道珍皇寺、この辺りから坂道になり清水寺参道に続き、往時から松原通は賑わった通りでした。平安時代後期には平氏の邸が立ち並び、今も町名に残されています(平清盛屋敷跡の三盛町、平教盛屋敷跡の門脇町)。鎌倉時代には北条氏の六波羅探題もありました。武士の居住地であったためか、この地には弓の弦の製造、行商をする「つるめそ」と呼ばれる人々が住んでおり、彼等は八坂神社の神人でもあった事から神幸の先頭を歩き、道筋を浄める役割を担っていました。いつの頃からか、柿色の衣に棒を引いた姿から武者姿、馬上の者も有る行列に変わりました。富岡鉄斎もこの武者行列を画いています。往時のつるめそが弦を行商する呼び声「弦召そう」から行列も「つるめそ」と呼ばれ、更に「つるべさん」に変わったと思われれます。

◆祇園祭の伝統行事が50年ぶりの復活
私事ですが、私方は昭和20年8月に疎開するまで弓矢町に居住、明治36年(1903年)生れの祖父はつるべさんに御奉仕し、馬に豊かな武者姿の写真が残っています。昭和49年(1974年)に武者行列が中止になり、町会所として建てられた弓箭閣に保存されている甲冑などの展示のみになっていたのが、行列の再開となり、千年を超える伝統行事の復活が慶ばれます。神幸祭・還幸祭どちらも三基の神輿が別々のコースを巡行し、肅々とした和魂と荒々しい荒魂を顕し、氏子の清浄、平安を護ります。玄関先で三代揃って神輿に手を合わせる人々の敬虔な姿を見ると、暮しの中に自然な相で宿る「神さん」信仰を見る思いがします。

◆移りゆく町の相とともに受け継がれる伝統
さて、六波羅辺りの事、東山一带、俗に「東山三十六峰」「ふとん着て寝たる姿や東山」(服部嵐雪)などといわれています。何となく優しい、なだらかな印象を抱きがちですが、東大路通を境にずっと南の方まで急な登り坂になっています。知恩院の男坂、女坂、八坂、東大谷、二年坂、三年坂、清水坂と続き、近年の呼び名ですが京女前の女坂まで何処も結構な急坂



清荒神清澄寺 鉄斎美術館 所蔵
江戸時代中期以降、東山一带特に清水焼と呼ばれるように、清水坂から馬町、日吉町、泉涌寺辺りまで窯業の地として発展したためか、弓矢の製造は姿を消しました。陶土屋さん、顔料屋さん、窯業の各段階の専門職の方々、登り窯を構えた窯元の家が軒を連ねていました。窯の煙の公害問題で、山科区の清水焼団地や宇治近くの炭山地区に陶芸家が移転して以降は寂しくなりましたが、所々面影は残っています。

◆つるめそと
各々の神輿は長柄も含め3トンを超え、担ぎ手も数百人に及ぶ多勢。神輿と同化して御奉仕するため、荒魂の折の神輿振り、環鳴らし、差上げの折のエネルギーの集約は、文字通り荒ぶる魂の爆発するような物凄さです。巡行の途路、行手を遮る車や不作法

な観客とチョットしたトラブルになる事もあります。先導の「つるべさん」に祓え・清めの役をしてもらえると、神幸祭の巡行も一層清々しく斎行される事でしょう。

ないとう ひでたか
内藤 豪剛 氏とのご縁に寄せて

京華堂利保の次男、2003年独立開業、和菓子塾開催。茶の湯菓子を中心とした生菓子のみ商う。茶道裏千家准教授。和菓子職人・内藤豪剛氏は、幼少期より祖父の和菓子づくりのノウハウを間近で見て育つ。職人の道を歩みつつ、茶道や華道、能や舞踊など、さまざまな芸術と文化に親しみ、その感性を磨く。内藤氏の実家には、富岡鉄斎の筆によると伝わる扁額が残り、かつて文化人との交流があったことをうかがわせる。また、氏は、鉄斎が一時暮らした熊野神社の裏手にもごく近い左京区聖護院山王町(東山丸太町交差点近く)に店を構える。芝蘭会の評議員を務められた加藤清允先生の曾祖父である安藤精軒氏は、明治期に施業院を開設した西洋医学の医師で、鉄斎が仮住まいした丸太町橋たもとの山紫水明處の当時の所有者でもあった。この重なり合う縁を手がかりに、歴史をたどる一助として本稿の執筆を依頼した。
(医学研究科附属ゲノム医学センター センター長 松田文彦)

「なりすまし電話」にご注意ください

最近、芝蘭会の方々へ芝蘭会員または京大医学部事務職員の名前をかたって、個人情報(住所、電話番号等)を聞き出そうとする不審な問い合わせの電話があるということを会員の方からご連絡をいただいております。芝蘭会とは全く関係がございません

ので、くれぐれもご注意ください。なお、芝蘭会では会員の方から住所変更等のご連絡がない限り、事務局からはお問い合せはいたしておりません。ご不審なことがありましたら、芝蘭会事務局までご連絡ください。





京都大学医学部附属病院 総合臨床教育・研修センター 「海外研修プログラム」経験談

ミシガンでの貴重な経験

京都大学医学部附属病院 臨床研修医

小倉 亮洋

2025年8月4日からの約4週間、VA Am Arbor Health Care System (以下VA)にて臨床実習を行いました。

まず初めに、芝蘭会の皆様には、この度の留学に際し、多大なご支援を賜り心よりお礼申し上げます。

VAは退役軍人とその家族を対象にした医療施設でミシガン大学と連携しており、ミシガン大病院の医師が多く勤務され

ています。私はHospitalistのチームに所属し、医学生やレジデントとともに回診やレクチャー、カンファレンスに参加させていただきました。

今回の留学に際して、私は次の目標を掲げました。
①アメリカの医療システムについての理解を深めること、②アメリカで働く日本人の医師と会い、自分の将来に役立てること、③この臨床留学は今年から始

まったもので私が一人目でしたので、京都大病院の研修医として適切な振舞いをして来年度以降につなげることを。

アナーバーで出会った「学び合う医療」

京都大学医学部附属病院 臨床研修医

孫 元 媿

今年は総合臨床教育・研修センター改革の一環として、初めての海外研修プログラムが実現し、研修医として米国で学ぶ機会をいただきました。

今年度は、病院までは徒歩10分とバス10分ほど離れた民泊から通いました。ホストファミリーとの朝

の挨拶や、通勤途中に通る木漏れ日の小径、ミシガン大学の学生たちの活気に触れる時間が、次第に日々の楽しみになっていきました。初めての海外研修で緊張もありましたが、街全体に漂う穏やかで知的な雰囲気や心を落ち着かせてくれました。

研修先のVA病院では、退役軍人の方々が対象に総合的な医療が提供されており、私は総合内科チームに所属しました。毎朝の回診では、指導医・レジデント・医学生が自由に意見を述べ合い、立場に関係なく真剣に議論する光景が広がっていました。

「考えることを学ぶ」場が、学生から指導医までをつなぐ教育の核になっていました。現地では、医学教育専門家のSanjay Saint先生とNathan Houchens先生から、お二人



の共著である「臨床実習ガイドライン」と「病棟教育学論」をいただきました。また、医師にとって大切な知識だけでなく、人と人との関係を築く力、信頼を得る姿勢こそが、教育と医療の根底にあるのだと教わりました。

この1か月の経験を通して、知識や技術に加えて「人を通して学ぶ」という教育のあり方を実感しました。帰国後も、患者やチームと向き合うたびに、アナーバーで学んだ「対話から始まる医療」を思い出します。

最後に、この貴重な機会を与えてくださった総合臨床教育・研修センターの先生方と、温かく迎えてくださったVA病院の先生方に、心より感謝申し上げます。教育の現場で得た学びを次の世代につなげられる医師を目指して、これからも歩んでいきたいです。



高折 病院長



矢部 副病院長



黒田 病院長補佐



パネルディスカッションの様子



小川 病院長 (大津赤十字病院)



大嶋 病院長 (兵庫県立尼崎総合医療センター)

直接の指導医であったNathan Houchens先生の回診では、患者さんとの丁寧な対話や学生の主体性を重視するレクチャーの進め方などを見て、今後の参考にさせていただきたいなと思うことが多々ありました。総じて、アメリカに来なければ経験できないことだったと思います。

私生活の部分では、ホストファミリーのBarbaraさんの心温かいサポートのおかげで、快適に過ごさせていただきました。MLBのシカゴ・カブスの試合を見たことはとても良い思い出です。

最後に、今回の海外臨床実習にあたって、多くの方々からご支援いただきました。京大病院で研修医として働きながらこのような機会をいただけたことは幸運なことであり、今回の経験を今後は自分自身にできる形で還元していきたいと考えております。そのためにも、将来を見据えて日々研鑽を重ねていくとともに、周囲にも良い影響を与えられるよう取り組んでまいります。

令和7年度 京大関係病院長協議会 定例総会を開催

京都大学医学部附属病院は、令和7年11月19日に令和7年度京大関係病院長協議会定例総会を芝蘭会館にて開催した。

総会を芝蘭会館にて開催した。本協議会は、同会員である関係病院長が親睦を深めるとともに、

続いて、病院経営への取り組みや課題について、高折病院長がコーディネーターとなり、パネルディスカッションが実施された。パネリストとして矢部大介 副病院長、黒田知宏 病院長補佐、大嶋勇成 病院長(兵庫県立尼崎総合医療センター)、小川修 病院長(大津赤十字病院)より、各病院の取り組み状況の講演が行われたのち、前田明則 病院長(静岡市立静岡病院)、小松和人 病院長(福井赤十字病院)がディスカッションに登壇し、関係病院の先生方との活発な意見交換が行われ、充実した定例総会となった。

度合い、治療の効果判定などを調べる目的で使われています。

PET製剤には、保険診療として使用可能な18F-FDGや18F-FACBCから、本邦未承認のものまで様々な種類があります。

PET製剤の効果や機序について話されました。ここではそのうちの幾つかのPET製剤について紹介したいと思います。

神経内分泌腫瘍(NET)の診断には、ソマトスタチン受容体を標的とした68Ga-DOTATOC/PETが有用です。

特にグレードの低いNETG1G2は、日常的に行われているEDG-PET/CTより優れた描出能を示し、病変の同定や治療方針(β線による内照射治療の適応評価)の決定に寄与します。

また、ホルモン産生腫瘍の局在診断にも有効で、原因となる腫瘍の切除でQOLの向上につながるのは腫瘍性骨軟化

症などでも経験することがあり、PET製剤が有用な疾患はNETに留まりません。

前立腺がんに対する画像診断では、68Ga-PSMA-11および京大で開発された18F-FSU888によるPSMA-PETが高感度・高特異度を示し、病期診断や再発評価において従来のCTや骨シンチより優れた診断精度を有します。

特にPSAが25ng/mlを超えてる症例では検出率が94%に達し、治療方針の決定に大きく貢献するとされています。

低酸素環境は腫瘍の進展や治療抵抗性に関与することから、18F-FMISOを用いた低酸素イメージングは、がんの病態把握や治療戦略の立案に有用です。

18F-FMISOは低酸素細胞に選択的に集積するPET製剤であり、放射線治療や分子標的治療の効果予測・層別化に寄与することが期待されています。

また、核医学画像診断の進歩

は検査に限りならず、乳房専用PET装置やMRI対応可搬型PET装置など、検査機器にも進歩がみられます。

「新しい製剤・医療機器の進歩により腫瘍核医学画像診断の未来は明るい」との結論で講演を終えられました。

いづれの講演でも質疑応答が大変盛り上がり、医学の専門的な知識がほとんどなかった私でしたが、最先端の話題をわかりやすく説明してくださったため、講演は刺激的で大変実りのあるものでした。

閉会のうちに立食形式の懇親会も開かれ、今後も継続的な知識共有と連携強化の場として発展が期待されると、学生ながら感じました。

以上をもちまして、芝蘭会阪神支部の報告を終わらせていただきます。

(文責・4回生 伊藤和央、3回生 中塚昌宏)

三重

てんかん病態と脳機能

解明への一歩は

アナロジの発想

令和7年7月13日(日)、津市アスト津にて、令和7年度芝蘭会三重支部総会及び懇親会が開催されました。

会は三重大学医学部附属病院の井上貴博先生の進行のもと行われました。

当日は多くの先生が参加され、芝蘭会三重支部の現状説明から始まり、特別講師の京都大学大学院医学研究科脳病態生理学講座臨床神経学分野教授の松本理器先生による講演が行われました。

◆大学の近況報告

はじめに、人事異動を含む京都大学医学研究科・医学部の現状報告がありました。また、芝蘭会の会員状況について、現在の芝蘭会三重支部会員の平均年齢は71歳、会員数は34人と報告されました。続いて、令和7年

性の疲弊に起因していると言われて

内側側頭葉てんかんは、高齢発症の場合は症状が軽微になりやすく、病気が発見されにくいこともあり

原因は熱性けいれんや、高齢者では脳内微小血管の動脈硬化、アルツハイマー病の前駆期の神経過剰興奮に起因する

てんかんの治療として、3剤までの抗てんかん薬服用でおよそ7割の患者さんは発作が消失します。

薬剤が有効となり、いづれに難治性焦点てんかんについて、脳外科手術により、原因とな

っている脳領域(てんかん焦点)の切除が有効です。また、てんかん外科手術の適応になら

ない難治性てんかんでは、迷走神経への電気刺激を行うデバイス療法(迷走神経刺激)が緩和

治療として可能です。非侵襲の各種検査で、てんかん焦点の正確な同定が困難な場合は、頭蓋内電極の慢性留置(硬膜下電極

や深部電極を多点留置するステレオ脳波・SEEG)を用いた術前評価を行い、てんかん焦点が同定されれば、焦点切除術で

発作が消失します。

◆特別講演

引き続き特別講演として引き続き「脳を知り、守る——システム脳生理医の立場から」と題して、松本先生にご講演いただきました。

松本先生は1994年に京都大学医学部医学科を卒業され、2000年には北米クリブランド・クリニックへの臨床留学、2018年からの神戸大学大学院医学研究科脳神経内科学分野教授を経て、2024年10月に京都大学大学院医学研究科脳病態生理学講座臨床神経学分野(脳神経内科)教授に就任されました。

互に深く関連します。こうした脳機能の解明についてのトピックとして、ヒト固有の高次機能である言語の研究に関して紹介がされました。

◆言語を司る新たな脳領域

言語に関連する脳領域として広く知られているのは、プロローカ野とウェルニッケ野です。

プロローカ野は運動性の、ウェルニッケ野は知覚性の言語中枢であると言われて

います。例えば、ウェルニッケ野の電気刺激により、被験者が文章を音読できなくなるということが報告されて

います。これらの領域に加え、てんかん外科の電気刺激マッピングにより、新たな言語野として、左側頭葉底面前方領域に位置する側頭底面言語野(BTLA: Basal temporal language area)が発見されました。

意味性認知症は、意味記憶、つまり「りんごは赤い丸い果物で、甘酸っぱい」といったような、一般的に知識や概念として表現される記憶が最初に障害される、認知症の一種です。

ゆえに、意味性認知症の患者さんには初期には、「物の名前が出てこない」、すなわち失名辞と呼ばれる症状で病院を受診されることが多い

です。この病気では、側頭極に次いでBTLAの位置する側頭葉底面前方領域の萎縮が見られます。

側頭葉てんかんの患者では、発作後に神経細胞が疲弊している時に、同様に失名辞、つまり物の名称を言うことができない失語を起す、ということが知られて

います。同様に、BTLAへの電気刺激では、失名辞が生じます。

これらのことから、左側頭葉底面には意味記憶の統合に関連する中枢が存在するのではないかと

いう仮説が立てられました。てんかん外科の術前評価のために、頭蓋内電極を慢性留置しているてんかん患者さんに研究に参加いただき、絵で提示した物の名前を次々に発話してもらいました。

呼称中の皮質脳波の神経活動と提示物の特徴量(視覚・意味・構音の属性)との類似マトリクス解析を行ったところ、物品提示後400ミリ秒以降の比較的遅い時間帯に、左側頭葉底面の神経活動と意味属性の間に

関が出現しました。このタイミングは、BTLAがハブとして様々な連合野から意味属性を取り出して意味表象が形成される仮説を支持するものでした。

最後に、脳内の皮質間ネットワークを調査する手法について、最新の手法とともに紹介がありました。

解剖学的なMRIトラクトグラフィや、機能的結合をみるfMRIに加え、皮質間誘発電位(CCEP)と

いう手法を松本先生が開発され、新たに導入されました。

CCEPは、頭蓋内電極を留置する脳外科患者に限られませんが、脳の一部に与えた微小な電気刺激がネットワークを介して伝播する電気信号を誘発電位として記録する手法です。

ミリ秒単位で因果性(方向性)を有した結合を個々の患者さんで同定することができ、MRIトラクトグラフィでは不十分であった脳内の機能的結合の解明に寄与することができるとのこと

でした。こうした脳機能ネットワークの解明は、先述のてんかん治療、手術中の言語線維の機能モニタリング・温存など、

◆「良質で安全な医療」は協治の仕組みで培う文化

令和7年11月16日(日)、ホテルリソル岐阜にて、令和7年度芝蘭会岐阜支部総会及び懇親会が開催されました。

◆大学の近況報告

はじめに、京都大学医学部附属病院医療安全管理部教授の松村由美先生から医学研究科・医学部・医学部附属病院の現状についての説明がありました。

波多野悦朗先生を研究科長とした医学研究科・医学部の運営状況や新任教授、人事に関するお話があり、また、令和6年3月末に竣工したがん免疫総合研究センターについても言及がありました。

学術講演

松村先生によるご講演は、実際の医療現場における「安全文化」をどのように醸成し、維持していくかという非常に実践的な内容でした。

本講演

様々な医療応用も考えられます。

講演では質疑応答が活発に行われ、たいへん盛り上がりました。

医学に関する知識が乏しい私でしたが、脳に関する話題をわかりやすく説明してくださったため興味深く有意義なものとなりました。

閉会後には懇親会も開かれ、日本の最先端医療に関する知識を交換する場として、今後のさらなる発展が感じられました。

以上をもちまして、芝蘭会三重支部の報告とさせていただきます。

(文責・3回生 浅野優之助、3回生 中塚昌宏)

◆「良質で安全な医療」は協治の仕組みで培う文化

令和7年11月16日(日)、ホテルリソル岐阜にて、令和7年度芝蘭会岐阜支部総会及び懇親会が開催されました。

◆大学の近況報告

はじめに、京都大学医学部附属病院医療安全管理部教授の松村由美先生から医学研究科・医学部・医学部附属病院の現状についての説明がありました。

波多野悦朗先生を研究科長とした医学研究科・医学部の運営状況や新任教授、人事に関するお話があり、また、令和6年3月末に竣工したがん免疫総合研究センターについても言及がありました。

学術講演

松村先生によるご講演は、実際の医療現場における「安全文化」をどのように醸成し、維持していくかという非常に実践的な内容でした。

本講演

様々な医療応用も考えられます。

講演では質疑応答が活発に行われ、たいへん盛り上がりました。

医学に関する知識が乏しい私でしたが、脳に関する話題をわかりやすく説明してくださったため興味深く有意義なものとなりました。

閉会後には懇親会も開かれ、日本の最先端医療に関する知識を交換する場として、今後のさらなる発展が感じられました。

以上をもちまして、芝蘭会三重支部の報告とさせていただきます。

(文責・3回生 浅野優之助、3回生 中塚昌宏)

◆「良質で安全な医療」は協治の仕組みで培う文化

令和7年11月16日(日)、ホテルリソル岐阜にて、令和7年度芝蘭会岐阜支部総会及び懇親会が開催されました。

◆大学の近況報告



なものなのだと思いつけられま

◆「安全文化」の実践には

なが必要か
本講演の中心となつてい

「公正な文化」(Just Culture)と、それを支える
「心理的安全性」の関係性です。
公正な文化とは、医療現場の第

また、エラーへの
具体的な対応方法として、システムズア



松村先生による講演
の後、写真撮影や懇親
会が行われました。

報がシステムに登録されてい
なかった。「処方時に警告アラ

が必要とされます。全員がオー
ナーシップを持つことが、強固な

Table with 2 columns: Date and Name, and 2 columns: Position and Organization. Lists various members and their roles.

人事異動

会員計報

Table with 4 columns: Name, Birth Date, Death Date, and Burial Date. Lists deceased members.

事務局から
平成17年4月からの「個人情報
保護法」の全面施行により、

原稿募集
芝蘭会報は、会員の皆様の情
報交換・意見発表の場であ